

年末恒例 餅つき大会

ノロウイルスの心配もありましたが、婦性会の年末の行事『もちつき大会』が二十八年十二月二十五日ありました。日頃からお世話になっていいる地域の方々や、在会者・役職員の年末のイベントになっております。子供の参加もあり、みんなでワイワイ楽しいひと時をすごせました。



さあ 蒸したて米が白にりました♪
アツアツ！の蒸気が出てます。

がんばれ～！
子供がもちつきしている姿、微笑ましいですね。



『よいしょー！』
『よいしょー！』

杵を下ろす度に、みんなのかけ声
が上がります。



餅つきの後は・・・

こちら恒例、皆で餅をいただきます♪。
つきたての餅は、おいしいです。
杵を持って汗をかいいた人、声援をおくってくれた人、
そして準備をしてくださった方々も、
それぞれの想いの笑顔です。



児玉理事長から、もちつき大会
について講評を頂きました。



小畑副理事長のハーモニカ演奏
もありました。皆で歌うなど、
大変盛り上がりしました。

頑張るシチュエーション

K・K

本年七月、婦性会を訪れるまで、私にとって更生保護施設は、ずっと不気味な存在だった(しかし婦性会に来るや、私の心配も杞憂と判り、今では施設に対して、心から感謝している)。実は右の懸念には或る理由が有った。施設に来る前、私は或る刑務所(名譽の為に、名は伏せたい)で、出所間近い人達の為に開催された

「就職フォーラム」に参加したのである。席上、ひとりの参加者が、更生保護施設の体験談として次の様な事を語った。「私が体験した更生保護施設は、まるで悪の巣窟だった。仮釈放中の人達が、そこちで集まってグループを作り、悪事を画策していた。私は怖くなって早速、手続きをして刑務所に戻り、満期までそこで過した」彼は恐怖を露わにして語ったのである。私は彼は余程運が悪かったのだ、と思いつつ、嫌な思いがずっと心に残った。

また、私は本免が入っても所持金が少なく、保護観察官との面談で窮状を訴えた。

観察官云わく、婦性会に言いなさい。三千元位は貸して呉れる筈。実情は違ったが、私は上手にやり繰りをして今日に至っている。

私が婦性会に入って嬉しかった事。それは人の心の温かみ、人情に触れる事が出来た事である。更生保護施設の大変さは言うまでもなく、将来の生活に目途を立てるべく、自分で道をつける事である。これは高齢者として例外ではなく私も悪戦苦闘した。その時施設長をはじめとする職員の方々から受けた温かい励ましの言葉を私は忘れる事が出来ない。

そして今や持病となった緑内障が重篤と判った時、素早く施設長は市に治療費を全額肩代わりさせる措置を決めた。私はただただ感激し、今も感謝の気持ちで一杯である。

私は今後、人々の幸わせの為にいい創作をする事。これを自らの使命とし、感謝の気持ちに代えたいと思っている。

(原文のまま)